

令和 6 年度 学校関係者評価報告

鹿児島中央看護専門学校 3 年課程看護科では、平成 23 年度より教育活動実施状況を総合的かつ客観的に点検・評価し問題点を明らかにした上で次期の教育活動や学校運営の改善に活かし、開かれた学校づくりを進めることを目的とした「教育自己点検・自己評価」（令和元年度より「教育自己評価」とする）を実施しています。更に、令和元年度から関係業界、保護者代表等、学職経験者から成る「学校関係者評価委員会」を設置し、学校関係者評価を実施しております。

令和 7 年 3 月 25 日に「令和 6 年度教育自己評価」「令和 6 年度事業報告」の結果をもとに、学校関係者評価を実施いたしましたので、以下のとおり報告いたします。

令和 7 年 4 月 2 日

● 学校関係者評価委員

（１）学校関係者評価委員（外部）

教育に関し知見を有する者	鹿児島大学教育学部 准教授 高谷 哲也（欠席）
教育に関し知見を有する者	鹿児島中央看護専門学校 前校長 富安 恵子
関連業界関係者	鹿屋市立鹿屋看護専門学校 副校長 竹村 真由美
	関連施設教育師長 同窓会やよい会会長 松山 郁子
卒業生あるいは保護者	保護者代表 今西 由香

（２）教職員

校長：今村 英仁（欠席） 副校長：久徳 美鈴 事務長：岡村 則和

教務主任：櫻美 尚美 実習担当主任：中村 栄子 教務・実習担当副主任：飯田 かずよ

専任教員：梶野 恵美子 森重 サユリ 大磯 陽子

● 令和 6 年度事業報告総括（久徳）

令和 6 年度は、本校事業目標 3 つの具体的計画に沿って活動した。

1. 社会から求められる看護実践力の高い看護師の育成

- ① 本年度は、全学年が新カリキュラムで運用。特に 3 年生は新カリキュラム最終学年となった。各講師の協力もあり計画通りに進行できた。カリキュラムに関する評価も教員で取り組むことで次年度への改善につなげることが出来た。
- ② 学生が主体的・能動的に学ぶ教育活動の推進においては、授業評価において学生の主体的授業参加は 4.77 を占めており評価は高かった。一部の講師の評価では課題も見え、学生が主体的に臨めるよう工夫（講義資料等）を行ってきた。
- ③ 看護技術の習得に向けては、学年別到達目標に向い技術到達確認を実施。2 年生においては、統合看護技術

I（模擬患者への看護技術の提供）を実施した。看護過程の実習に繋げる学習の機会となった。3年生は卒業前にディプロマへの到達状況を評価するため技術試験を実施。本校の期待する卒業生像に到達したかの確認となり今後の課題も見えた。学年交流技術演習の成果は発表予定である。

- ④ 地域の多様な場での学習推進については、地域への関心を高めるための学習が計画に沿って実施できた。深い学びを得た。
- ⑤ 臨床との協働は倫理的感性を育むことを重視し、倫理カンファレンスを継続。学生は日常ケアや医療者としての姿勢などを深めている。統合実習Ⅰの工夫（ナースの臨床思考にふれる）は、学生の臨床判断を育む機会となり、その後の実習へ活かされていた。
- ⑥ 地域医療への関心の高い学生の輩出においては、県内就業率 95.3%と本年度も高い就業率であった。3年生 43名の就職・進路状況（慈愛会 34名、市立病院 4名、南風 1名、名瀬徳洲会 1名、池上総合病院（関東） 1名、吉井整形外科内科中央病院 1名、海外へ 1名）全員の進路が決定した。

2. これからの看護基礎教育の動向に対応した学習環境を整えとともに、学生への支援体制の充実を図る。

- ① 学生ひとり一人の学習支援については、学力面・精神面に課題を抱える学生が増える中、学年担当を中心に学業に臨めるよう支援した。学業不振（単位未修得）や病気療養による休学者が本年度は3～5名となったが、4名は復学を希望している。R7は合理的配慮の制度運用も進める。
- ② 新カリキュラムの卒業時到達自己評価では4段階評価において平均 3.73と高い評価であった、特に「人間を理解する力」「人間関係を築く力」「研鑽し探求し続ける力」は身につけてきたと回答した。本校が目指した力は多くの学生が身につけて卒業できたと考える。
- ③ 本年度は、卒業時到達を確認するための技術試験を実施し卒業生の現状と課題もみえてきた。次年度からのカリキュラムに活かす。
- ④ 教員の倫理行動指針を全員で活用しながら、日々の関わりを振り返る機会を継続。学生支援の充実に繋がっている。
- ⑤ 国家試験への支援については、実習終了から強化学習に取り組み全員合格を目指した。
- ⑥ 放送大学の併修制度は4年目を迎え、本年度は27名の学生が学んでいる。放送大学支援チームによる学生間交流や単位の取得状況を確認。卒業生の支援について、看護部とも情報の共有を行っている。
- ⑦ 慈愛会奨学生（100名、80.6%）、専門実践教育訓練給付金（12名）が利用。多くの学生の経済的支援を継続的に行ってきている。
- ⑧ 電子テキスト、iPadの活用は定着。授業資料、学生の発表、技術動画の活用など工夫している。しかし、授業姿勢に課題も生じてきているため、授業資料等工夫が必要である。教育DXの推進は必須であるが、電子テキスト含め評価も必要である。次年度は教育イノベーションチームを立ち上げ検討開始
- ⑨ シナリオ・アン等のシミュレーション学習についての共有と浸透が課題。教員学習の工夫を次年度行う。教員学習会の取り組みや研究授業、看護研究については、計画に沿って実施。学びの共有となり自己の教授法へ活用。ディプロマの共有の機会となっている。
- ⑩ 安全管理委員会を定期的開催。ハラスメント事案無。合理的配慮に関し体制を構築。R7～運用予定。BCPに関しては有事への対応が急がれるので、R7早急に取り組む。
- ⑪ 本校は全教員が有資格。教員12名と臨床指導教員を2名確保し質の高い教育に繋げることができた。非常勤66名。講師会議を8月の開催し、学生の現状を共有した。

- ⑫ 教育の質向上に向け、各教員は目標管理を行いながら自己啓発を目指した。ラダー運用から 4 年目となり本年度もラダー取得を 5 名が目指した。また、本年度はラダーの改正にも取り組んでいる。R7 は新たなラダーの運用を進めていく。
- ⑬ 教員学習は定期的に取り組むことによって、教育観をそろえる機会となり、他教員の取り組みを参考に授業に役立っている。
- ⑭ 本年度は、医療安全管理者研修、災害支援ナース研修、専任教員研修等資格取得に係る研修に参加した。

3. 学校の存在価値を高め、地域に必要とされる学校運営を推進する。

- ① 本年度は学生確保に力を入れ学校在り方検討会を発足。学校の広報強化、高校訪問 49 校（昨年比 + 17）内離島 9 校訪問実施。広報の成果あり推薦入学 26 名（+ 9 名）と確保でき、45 名の学生を確保することができた。
- ② 令和 7 年度は外国人留学生 1 名の入学も決定。本校が外国人留学生の看護師資格取得への道に貢献できることは、キャリア形成の機会拡大への支援につながり大きな意義がある。支援体制を整備し支援する。
- ③ 一般高校生の受験者減には歯止めがかからない。社会人確保や学校推薦での確保に力を入れる。
- ④ 学校の運営に関しては、学生数減のため厳しい状況であったが、不要な経費削減につとめ + 収支とすることができた。
- ⑤ 教育の要となる教職員の働きがいのある職場づくりにおいては、有給取得は、必要時取得できる風土がある。お盆、正月を含め学校全体で 5 日間の休暇取得ができた。
- ⑥ 組織風土調査では、お互いを気遣う雰囲気や全員で力を合わせる風土が見られる。昨年比では仕事に対する厳しさや目標達成への貢献は伸びたが、ミーティングやチームワークが若干低下。一人ひとりの承認に働きかけていく。退職者もなく、安定したチームで次年度も継続できることは強みとなる。
- ⑦ 教務事務との協働は効率的に進めている。ミドルマネジメント研修で成果を発表できた。
- ⑧ 学校評価委員会を定期的開催。中間での取り組みを教職員で共有。自己点検においては年間の取り組み状況と評価の視点を共有し教育自己点検への協力を求めた。学校関係者評価委員会は継続して開催予定。教育自己点検では R5 より若干上昇した。
- ⑨ 本年度、大きな取り組みとして学校在り方検討会を発足。慈愛会本部とも協働しさまざまな取り組み（学生広報の強化、奨学金制度の見直し、留学生受け入れ整備と準備、地方・県外、離島学生向けの住居の提供、今後の学校在り方等）を実施した。
- ⑩ 地域に根ざした貢献活動では、学生による地域清掃活動開始。学生のボランティアを推進した。（3 月末述べ 48 名の学生が参加）。多くの活動に参加した学生を表彰予定である。また、卒業生サポートキャンパス、Jseaty 交流研修開催により互いの指導観、看護観を深める機会となった。
- ⑪ 環太平洋大学からの専任教員の教育実習の受入れ、県主催の専任教員養成講習会への講師派遣研修生の受け入れ、鹿児島県教育協議会への貢献など行うことができた。

● 令和 6 年度教育自己点検・自己評価 報告（櫻美）

- ・ 令和 6 年度、教育自己点検・自己評価結果と次年度への改善事項について報告。

（結果は令和 6 年度 教育自己点検・自己評価参照）

● 協議事項、意見交換

< 令和 6 年度教育自己点検・自己評価に関すること >

富安：「教育自己点検・自己評価」について、資料が大変見やすく整理されている。評価が「概ね適切」であったことは、熱心に教育されている成果だと考える。卒業生のうち 1 名が海外へとあるが、どのような事情か？また海外留学生を受け入れるにあたって不安や課題はないのか？

久徳：海外に行く予定の学生は、家族の事情によって渡航する予定である。就職も未定である。

中村：入学予定の留学生は、言語能力は N2 であり日常生活には支障ないと思うが、たくさんの言葉を投げかけると理解が難しい状況。専門用語の理解や授業についていけるかなどは不安がある。支援パスに沿って支援していくが、早速、入学前に専門用語の学習を進めてもらっている。専属教員を 1 人つけて、日々の理解度を確認し支援していく予定である。クラスメートの支援も必要である。

岡村：学費や生活費等の資金調達が難しいので、慈愛会より奨学金の手続きを行っている。また、在留資格も現在の介護ビザから学生の身分に変更する必要がある。一年一年の更新手続きが必要で、支援団体にも協力してもらって、今月末までには手続きができる見込み。

久徳：小倉看護専門学校など先行して留学生を受け入れている学校から情報をもらいながらやっていきたい。真面目な学生が多いとのことである。丁寧に支援していきたい。

富安：慈愛会では介護分野で外国人を受け入れているので参考にしたらよい。これを機会に留学生の学生が増えると思う。

久徳：実習施設との調整も必要になってくるので協力をお願いしたい。

竹村：過去 3 年間に就職した外部施設への「卒業生アンケート」で「倫理観」「報告・連絡・相談」の項目が低かったとあるが、具体的にどのようなところが指摘されたか教えてほしい。

櫻美：慈愛会関連の施設への就職が多いため、もともと外部施設への就職は少ない。今回は 16 名についてアンケートをお願いし、11 名について回答があった。施設名も書いていないので詳細は不明だが、1 年も経たずに退職した学生もあり、辞め方の問題もあるかと思う。本校では「倫理観」「報告・連絡・相談」とともに力を入れて教育してきたつもりであったが、ギャップがあることがわかった。何を報告・連絡・相談するべきかを教育していく必要があると考える。

松山：留学生はどちらの国の方？（⇒ベトナム。在日 4 年目で介護福祉士資格を日本で取得）インドネシアからの EPA を受け入れて、毎日一緒に勉強したこと経験がある。実習での受け入れを協力していきたい。

今西：介護施設で介護留学生を受け入れているが、当初はスタッフの方に免疫がなくザワザワした雰囲気があった。留学生自身は優しく素直で、利用者の受けもとても良い。実習ではこちらにも楽しみに受け入れできと思う。

中村：本人もいろいろ不安だと思う。入学してすぐ基礎看護学実習Ⅰ-①がある。患者やスタッフともコミュニケーションをとるので様子を見ていきたい。

久徳：オープンキャンパスに参加してくれたが一生懸命であった。他の学生にも身近で国際交流ができ、良い影響がある。学校としても価値を高めることができると思う。

竹村：いろいろ工夫されていて参考になる。当校は田舎の看護学校で、軍隊教育に近いのかもしれないが、「報告・連絡・

相談」は 1 年次最初から日々日常的に教育している。「今から〇〇します」「全員揃っています」など。無断欠席などには厳しく指導している。

森重：現 2 年生は、2 年次にあがった時点で「挨拶をしない」、「前を向いて座っていない」「掃除をしない」などの状況であった。「もう一度、やり直し」を繰り返してきた。1 年次からの躰が大切だと思う。

今西：娘が 2 年生にいますが、入学時点で看護師への思いに乖離があることを感じていた。授業中も授業に向かっていない人がいることに戸惑っていたようだった。行事や実習に向かう中でクラスの雰囲気が変わってきたと言っていた。

松山：今、高校では欠席する際もメール一本で済む。次の日、先生に報告することもしない。利便性の中で、当たり前なことが当たり前でない。だが看護師にはとても大事なので「報・連・相」は力を入れて教育していかなければならないと思う。

富安：学年交流技術演習の内容は？

飯田：1、2 年生が対象で、バイタルサイン測定、清拭、移乗・移送について、2 年生が 1 年生に教える。2 年生にも復習になる。学校に慣れること、学年間交流の目的もある。

富安：学生アンケートの Q2「授業以外での自宅や学内で、予習・復習に費やす時間はどれくらいか」の間に、3 年生でも 2%の学生が「全くない」と回答しているが、3 年生の状況はどうか？

櫻美：自己学習の少ない学生は、アルバイトに自分の時間を費やす学生もいる。1 年生の中には、アルバイトを掛け持ちしている人もいる。出された課題には取り組むので、課題を提示して比重を考え授業を進めていくとよいと思う。

久徳：今年初めての試みであったが、「統合看護技術Ⅰ」で慈愛会関係の看護師の先輩方に模擬患者になってもらった。模擬患者になった感想などあればお願いしたい。

富安：学生が本当の患者として接してくれた。とても緊張して、思い通りにいかなかった人もいたが、リフレクションで患者が具体的に感想を伝えることができた。協力をもらえる環境はありがたいと思う。

梶野：「統合看護技術Ⅰ」では、2 年次から始まる「看護過程の基礎」で用いる事例患者に、実際に援助し、評価・修正することを行った。模擬患者にいろいろなケアを組み合わせで実施し、リフレクションの中で看護を語ってもらった。その後、基礎看護実習Ⅱにつなげたが、学生がそれぞれの受け持ち患者に合わせて、看護ケアを工夫して実施していたことは成果だと考える。授業の中で「元気のない A さんに深いため息の出るような心地よいケアを実践する」ことを目標としていたが、安楽の知識・技術が乏しいことがわかった。次年度から、基礎看護技術に「安楽をもたらす技術」を設け、時間数を増やす。

竹村：学生の授業評価が AA で素晴らしいが、シナリオモデルの活用が B で、ICT 教育がやや追いついていない印象があるが？

櫻美：シナリオ、フィジコ、アン等の利用については、学生が主体的に使用することはなかなか難しいが、シミュレーション学習の中で活用している。もっと活用できればよいが、教員が入れ替わっているため、全員が使えるようにチーム活動の中で勉強会をしている。

久徳：学生の授業評価は回答がなかなか集まらず、項目を 10 項目に減らした。I Pad は利便性があるが、授業中、頭を上げない、動画など違うことをしているなど学部講師からのご意見もあった。できるだけ参加型にするなど、授業の工夫が必要である。

竹村：以前、関西の看護系大学にフィールドワークに行き、授業風景を見学した。やはり I Pad で違う画面を観ていた。当校も電子テキストを導入する予定だが、「I Pad を導入したらこうなるか」と思った。何か I Pad を使用する際のルールなどを設けているのか。

櫻美：今のところ、授業の受け方についての細則等はないので検討したい。

梶野：講師から授業態度の指摘があり、クラスで数回話し合いを持った。その中で、紙資料にしてほしいと学生から希望があり、1 月から講義資料を原則紙にした。それも良かったのか、授業態度はかなり改善された。ただ、紙資料を整理できず、ロッカーに積み重なっている学生が数名いる。新たな課題がでてきている。

< 学校運営の改善提案に関することについて >

今西：鹿中看のInstagramがあることを最近まで知らなかった。入学式や卒業式の時に、保護者にInstagramを紹介してみてはどうか。保護者も学校の様子を知りたいと思う。

中村：ぜひ、やろうと思う。タイムリーにアップできればいいのだが、なかなか難しい。学生の方がセンスがいいので、次年度は学生の力も借りてやっていきたい。

松山：次年度は 45 名の学生を確保できてうれしかった。ふれあい看護体験などでも鹿中看を紹介している。（⇒実際紹介されてきた人もいた）学生が高校生に血圧測定するなどよい雰囲気だった。今年もぜひ参加してほしい。

竹村：合理的配慮については、難しいと本校も感じている。どのように対応していくのか？

久徳：安全管理委員会でフロー化して支援方法を作成した。窓口を決め運用したい。身体障害については、ハード面の改修は難しい。学校でできる範囲で支援したいと考えている。

富安：学校のハード面がもっと整えばいいと、かねてから思っている。学生にも申し訳ない気がする。図書室が遠いので、新刊を第一校舎に置くなど、工夫しながら対応してもらっているが早急な対応が必要なのではないか。

久徳：新築移転には、経営的に安定することが必須で現在進行していない。当面はこの現状のままで選ばれる学校を目指すことにしている。学校の在り方検討会でハード面を活用しやすくなるような取り組みをしていく。築 63 年経過し、老朽化してきている。将来的な視点でも考えていかなければならない。

富安：いづろ地区の構想改革をきっかけに変わらないかと期待している。耐震面の安全性も考えて今後のことを検討してほしい。本部への進言もしていったほしい。

< 全体を通しての各委員のまとめ >

今西：なかなか学校の活動内容を知る機会がなかったが、保護者としては安心できる学校だと思った。

当法人の職員としても質の高い看護師をともに育てていきたい。

松山：今村総合病院は 7 つの看護学校の実習を受け入れている。その中でも本校の教育は、ひとり一人の学生に丁寧に行われており、卒業生の慈愛の看護につながっていると思っている。就職後のサポートをしっかりしていきたい。

竹村：看護学校の抱える課題はどれも同じ。時代の変化の中で、いかに看護の魅力を発信していくかだと思う。他校の会議に参加させてもらい、いいヒントを得た。自校の教育の参考にさせてもらう。

富安：教員が学生ひとり一人に愛情深く関わっていることがよくわかった。毎回の会議で指摘されたことが次の会議では改善されている。出席した甲斐がある。本校は全員有資格の教員である。今後も一層の努力をお願いしたい。

副校長：大変充実した時間であった。すぐ実践できること、考えなければならない課題等多くの示唆をいただいた。学校を存続させていくためには、選んでもらえる学校にする必要がある。きちんと教育して、きちんと卒業させること、倫理指針に則ってひとり一人を丁寧に教育していくことが重要である。いろいろ厳しい状況もあるが、いい教育ができるよう頑張っていきたい。

● 学校関係者評価 総括

今回の学校関係者評価は「令和 6 年度教育自己評価報告」「令和 6 年度事業報告」をもとに実施いたしました。特に本年度は、少子化の影響や基礎教育大学化の流れの中、学生確保に力を入れるため学校在り方検討会を発足し、広報活動を含めて取り組みを工夫しました。中でも外国人留学生の受け入れを開始することは大きな事業となります。委員の方々からは、留学生受け入れに関する学校の体制整備や今後の学生募集についての工夫や多様な学生を受け入れながら、これからの看護師に期待される能力を身につけるための教育活動についてご意見を伺う機会となりました。

また、学校として努力していることや学生を大事にする教育がなされていることを評価していただきました。しかし、学校の老朽化に対し、学生の安全確保の点からご意見がありました。令和 7 年度も、学校在り方検討会を継続し校舎のハード面について検討を重ねて参りたいと思います。

今後におきましても、より良い学校運営を推進していくため、学校関係者の皆様から頂きましたご意見を真摯に受け止め、学校運営に活かしていくとともに、本校の教育理念に沿った、質の高い卒業生を看護師として継続的に輩出し、地域医療に貢献していけるよう努めていきたいと考えております。ご協力、ありがとうございました。